



水泳「水辺文化」分科会情報

水泳「水辺文化」分科会では、「水泳の外注化」の問題を一番の課題として論議しています。全国の学校でプールが老朽化し、補修・改修は行わず近隣の学校や市民プール、スイミングスクールなどを利用するところが多くなっていることを「水泳学習の危機」ととらえています。一番の問題は、授業をスイミングスクールに丸投げしてしまうことです。学校現場には、「プロが教えてくれるなら」とスイミングスクールによる指導を歓迎する声も多いようです。しかし、その指導について考えてみる必要があります。特に「水中で息をはく」「ボビング」という指導は水を吸ってしまっせてむせてしまう子が出る、浮きを確保するためにも特に初めの段階では息こらえをすることが大事であると考えてきたこれまで分科会の研究の成果から考えても問題があります。

「水泳の民営化」とも言えるスイミングスクール丸投げに対抗するためには「命を守るため」の授業がカギになるのではないか、まずは学校で「どんな水泳授業をめざすのか」を論議するところから始まるのではないかなどの論議をしました。

武蔵野大会の実践報告を通しての論議では、音楽水泳の実践（佐賀）で「水の中の姿勢制御」について論議しました。水の中で自由に動けるようになることが泳ぐ前の段階ではとても大事でそれを楽しくやれる音楽水泳などの教材をもっと深めていこうと論議しました。また、呼吸に注目した実践（岡山）では、子どもたちが運動を「自覚化」することを大切にした実践で、呼吸の音の言語化などに注目して論議をしました。小学2年生で水慣れ・水遊びから浮き、そしてふし浮き呼吸までできるようになる系統を示した実践（奈良）では、グループ学習で子どもたちが学んでいくためにグループノートなど細かい手立てがあり、低学年実践のモデルとして学ぶことができました。

呼吸（息つき）について、浮き姿勢について、顔の上げ方、子どもたちの体の使い方などかなり深い論議ができた分科会になりました。

